

総合人間学部/人間・環境学研究科

Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

68



2022.3

総人・人環広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から			
真の生、別の生	多賀	茂	2
「小人閑居して不善を成す」 半世紀を通じて京大で学んだこと	奥田	敏広	4
細くでも、長く	赤松	紀彦	6
京都大学で、吉田南の地で	杉山	雅人	8
連載企画「総合人間学とわたし」			
「・」は和合	立木	秀樹	10
総合人間になるための学部?		自 哲	14
新任の先生方より			
着任のご挨拶	THIES H	lolger	16
「他者」を架橋する	DE ANTONI A	ndrea	17

真の生、別の生

多賀 茂

(総合人間学部 人間科学系/ 人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



今私がこの原稿を書いているのは、新大阪駅近くのビジネスホテルの極めて狭い一室の中である。この6日間一切部屋の外へ出ることは許されていない。生まれて初め

ての経験。監禁状態である。いろんなことを考え た。考えずにはいられない。

定年退職前の二年間は、コロナ禍に圧倒される 日が続いた。慣れないオンライン授業に対応し、 これまでしたことのないような授業の準備をし た。ただ最後の年の後期、学部・研究科の他の先 生方からの支持のおかげで、私はフランスへ在外 研究に出ることを許された。長く研究と紹介に努 めてきた「制度を使う精神療法」の本拠地である ラ・ボルド病院での実践に実際に加わり、その最 も大切なところをつかもうと思っての出発であ る。まずオンラインで学生との面談を重ねつつ 3ヶ月を現地で過ごし、1月に一時帰国、指導した 学生の論文の審査・公聴会などの仕事を行ったう えで、2月に再渡航し、研究をさらに進める予定 であった。ところがその一時帰国の前に、予想外 のことが起きた。フランスではいったん収まりか けた流行が11月から再燃し、さらにオミクロン株 という新しい、しかも強烈な感染力をもった異種 株が現れたのである。瞬く間にフランスでの新規 感染者数は10万人を超え、12月末に日本入国の 際の施設隔離の期間が6日に伸ばされた。1月に 入るとさらに新規感染者数は40万人を超え、そん なフランスの事情を考えれば、仕方ないなと私は 納得しながら滞在先のホテルの部屋に入った。

初めの2日間はなんということもなく過ぎた。 適度な運動、入浴、そして食事は3回ドアの前に 置かれているのを手だけ外に出して受け取る。日 本でもフランスでも、毎晩ワインを欠かしたこと がない私だったが、アルコールを飲めないことに さほど抵抗はなかった。しかし3日目になって、 異変というか奇妙な感情が生じた。「現に存在する ものを見たい。」窓から見えるものは、雑多なビル 群と新幹線の線路と空、彼方に山が見えるだけ。 あまり窓のカーテンを開けることはなかった。と なると私が見ていたものは、部屋の壁や机やベッ ドの他は、パソコンの画面とテレビだけだった。 平らな2次元の平面上に人工的に作られる映像す べてに現実感が伴わない。嘔吐とまではいかない が、軽い拒否感のようなものに私は襲われた。フ ランスにおいてきた妻の助言で、窓の外の風景を スケッチしてみる。確かに、雑多と思われていた ビル群がたとえようもなく美しく見えてきた。無 秩序に並んだ窓、壁、ベランダ・・・すべてに凹 凸があり、奥行きがある。そう、おそらく私が求 めていたのは、奥行きのある空間だったようだ。 ヴァーチャル・リアリティや AR ではだめなので ある。ただ奇妙な感情はそれだけではなかった。 「なにか本物が食べたい」。提供される食事は、朝 は決まったようにサンドイッチ、ジュース、少し のフルーツそしてサラダ、昼と夜も同じような弁 当。特にマヨネーズやハムを挟んだ朝のサンド イッチと、四角い箱に入った夜の弁当に、私は三

日目から突然拒否感を覚えた。もちろん、税金でまかなわれていることを考えれば文句を言うべきではないと言うひともいるだろう。「上等でおいしいものが欲しい」というわけではない。人間の手が調理したもの・・という感じだろうか、自然のものを人間が切り、火を通し、味付けをしたものが言い様もなく食べたくなったのである。四日目からは、慎重にメニューを選んで宅配で夕食のメインを頼み、朝食用にはベーカリーが作ったパンを注文した。そんなことだけで私は救われた。卒業生の一人からの差し入れも届いた。

もう一つ別のことを書いておこう。10月半ば、 私たち家族3人は二つの大きなトランクと小さな トランク一つに入る荷物だけでフランスへ出発し た。滞在地はブロワというロワール川沿いにある 人口5万人ほどの歴史都市である。住居探しは難 渋したが、町の中心と郊外の境ぐらいに小さなア パートを借りた。家具付きであったが、食器など はあまりにも汚れていたり趣味が悪く、自分たち で買いそろえた。もちろん大中小それぞれ3つず つ最低限の数の食器である。衣服はトランクに入 れて持ってきたものに、最小限の下着などを買い 足した。10月から1月まで3ヶ月の間――そして これからも――、実は私たちは、日本にいた時に は考えられないくらいの少数の生活物資で暮らし たのである。しかも、不自由であるとか、哀れっ ぽいなどとは毛頭感じなかった。ヴェルサイユ宮 に代表される17世紀黄金時代のフランス文化よ り、さらにもうひとつ歴史をさかのぼった16世紀 のフランス、ルネサンスにまだつながっていた時 代のフランスが、城や町並みに感じられる。樹木 も蒼古という言葉さえ浮かぶほど相当の年月を生 きている。昔ながらの市場。ロワール川に住み着 いている白鳥に娘と残ったパンをやりにゆく。「生 活にそれほどものはいらない。」この3ヶ月で私が 心から感じたのはこのことである。

定年直前のこの2月に出版した著作『概念と生』 で、私はドゥルーズやフーコーやバルトらについ

て語った。なぜか彼らが最後に残した思考は、「生」 と関わっている。あるひとつの生としての内在、 真の生と別の生、そして新生。そしてその著作の 最後で私は、アガンベンを参照しつつ、私たちが 今後生きるべき生について問うた。残りのものの 生。これまで人間がなしてきたすべてのことども を引き受けつつ、未来を引き受ける生。どうも私 には、少し減らすこと、少し押さえること、少し 拒否すること、それがそうした生の姿であるよう に思えてならない。もちろん、買うことの喜び、 持つことの快楽、身につけること、使うことの快 感、そうしたことを私が知らないわけでは全くな い。むしろそうしたことに私は人より多くの情熱 を傾けてきたとも言える。自動車、衣服、食事。 私が愛したものたちは、人間が作り出した本当に すばらしい作品だった。しかし今、私はそれらを 少しずつ捨てつつある。私が死へと向かっている からなのか。いやそうではない。私が今、新しい 生へと向かっているからだ。少々の勇気と決断が いる。しかしそうした方が良いと思う。断捨離と いうような老境の決意ではない。人生の清算では ない。19世紀以降ヨーロッパを中心として急速に 進展した、資本主義的な生産と欲望と消費。地球 温暖化の問題も、それらが引き起こしつつある大 きな問題のひとつである。人間は自己を超えてい く存在である。それは人間に定められた運命であ る。しかし、今その自己の乗り越えは、後ろ向き へと反転すべきである。小さくなるために自己を 超えること。それが人間の真の生、別の生である。 こんなことを私は考えた。

電話のベルが鳴る。「陰性でした」という声。 やっと出られる。「しっかり前を向いて、僕は行く よ」、ガタリは最後にこんな台詞を口ずさんだ。出 発のリトルネッロ(主題を調を変えながら回帰さ せるバロック音楽の形式から、ガタリが作った概 念)である。

(たが しげる)

「小人閑居して不善を成す」 半世紀を通じて京大で学んだこと

奥田 敏広

(総合人間学部 人間科学系/ 人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



社会はエゴイズムのかたまりである個人の打算と妥協の産物に過ぎず、理不尽と悲惨さ、醜さと悪意に満ちたものなので、できるだけ関わらずにいた方がいい、

これがずっと物心ついた頃からの私の思いであ り、それは大人になり進路を考え具体的に職業を 選ぶにあたっても、基本的に変わることはありま せんでした。私たちの世代の子供時代のヒーロー である手塚治虫の『鉄人28号』においても、私が 惹かれたのは無敵の鉄人自身やそれを直接操る正 太郎少年ではなく、地味で表面には出ない敷島博 士でした。そんな私にとって、社会や組織から独 立した形で仕事が出来る(と思われた)大学の研 究者は、願ったり叶ったりというわけではないに しても、何とか生きていける数少ない居場所とし てまさにありがたく思われました。しかし、この 私の思いは、学生(院生・研修員)として過ごし た10数年、教員として過ごした30年間において 根本的に変更を余儀なくされ、いまこうして定年 を迎えようとしています。いったい何があったの でしょうか。

それは、一言で言うならタイトルに挙げた『大学』伝六章の有名な一節、「小人閒居爲不善」ということに尽きると思われます。もちろん、京大教

員としての職場が「閑居」というのではありません。私たち教員だってそれなりに授業もすれば、 興味に駆られて調べものもしています。しかし、 そもそも当時はまだ研究発信による社会への貢献 や、教育者としての責務といった社会を構成する 積極的な市民としての意識が、今よりもずっと稀 薄な時代でした。そのような社会の中で、特に京 大には基本的に寛容な不干渉とでも言うべき、ま がりなりの自由がなんと言っても頑として存在し ていました。それは前任校であるきわめて小規模 の理系単独学部のムラ社会的な窮屈さとも違え ば、象牙の塔のような尊大な特権階級意識とも違 い、ある種の「隠者」的な生活と私には感じられ たのでした。

しかし、社会を蔑視していたが故に望み、手に入れた「隠者」生活でしたが、次第に私はある種の物足りなさと、自分自身のちっぽけさや無力さを感じるようになりました。それまでの私には、邪悪な社会とは対照的に、自分自身はそれなりの存在であって、悪徳とは無縁であると素朴に信じていたのが、それは自己認識の甘さに過ぎず、自分もまた社会から切り離されてひとりに放っておかれると何もできないし、もっと悪いことにはついつい安穏さに走りがちだと実感させられたのです。そういう意味で、「小人」とは人格が低くてつまらない人物という特別劣等な人間ではなくて、ごく普通の人間、いやひょっとしたら潜在力とし

ては卓越した能力を秘めてさえいる人間かもしれません。ただそういう人間も社会から孤立しコミュニケーションを欠くと、つまり「閑居」すると、「小人」になってしまうのです。そう実感すると、自分のまわりの教員や学生に徐々に目が向きだしました。かれらの関心や活動が気になりだし、刺激と活力を受けるようになってきたのです。事務の方々の尽力と貢献も、また遅まきながら分かってきました。その刺激や活力、感謝は実に多大なものでした。

しかし、これは昨今喧伝されている「共同研究」 や「産学共同」による「社会貢献」といった際の 「共同」とはいささか趣を異にします。私が体験し たのは、もっと広く普遍的な意味での「共同」で あり、最近世界的ベストセラーとなった『サピエ ンス全史』においてユヴァル・ノア・ハタリが、 ホモ・サピエンスという種の本質として描いてい るような、コミュニケーションという行為の重要 性です。肉体的能力においてはもちろん、知的能 力としてもホモ・サピエンスよりすぐれた種は史 上いくつか存在しました。たとえばホモ・ネアン デルターレンシスなどは個体としての身体的・知 的能力ともに、われらホモ・サピエンスより優れ ていました。しかし、それらが絶滅してホモ・サ ピエンスだけが生き残ったのは、ひとえにこのコ ミュニケーション能力のおかげなのです。

そして、私が今までもっぱら研究してきたトーマス・マンやワーグナーという、それぞれ20世紀と19世紀を代表する芸術家たちが、その生涯と情熱をかけて表現しようとしてきたことも、そのような社会性にほかならないのではないかと考えるようになってきました。たしかに、トーマス・マンの初期の作品には19世紀末の病的アウトサイダーたちに溢れており、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』には愛の極致としての死との共感が描かれています。しかし、かれらがその生涯と

作品によって表現しているものは、結局のところ 排他的で貴族的な審美的世界ではなく、民主主義 的な意味における社会ではなかったかと考えるよ うになってきたのです。前者のアウトサイダーた ちは社会参画を求める渇望の表現であり、後者の 愛は「パン・エロティーク」として万物に対する 求愛の表現です。それは、語幣を恐れずに言うな ら、まさに広い意味での民主主義なのです。かれ らはその民主主義を実体的な制度としてではな く、より根源的な人間の本性として表現したので した。

押し付けられたり強制されたりするのではなく、ある意味でその対極にある孤独と脱社会を徹底的に体験することによってこそ、「共同」の大切さを実感しその実現を願うようになること。これこそ京大流「知的共同体」であり、容易には崩れない強固な真の「共同」の基盤にちがいない——このことこそ私が半世紀に及ぶ京大生活において学んだことにほかなりません。

論語(微子第18の6)に、「鳥獣不可與同群也、 吾非斯人之徒與而誰與(鳥獣はともに群を同じく すべからず―。われ斯の人の徒とともにするに 非らずして誰とともにかせん。天下道有らば、丘 はともにかえざるなり」とあります。これを私に 当てはめれば、次のような私の京大に対する密か な愛情と感謝の表現となるでしょう。「私は鳥や獣 とは共に生活することはできないように、恐らく この社会で普通に生きていくことはできない。私 は、京大の人たちと共に生活しないで誰と共にし ようか。もし社会に道が行われてよく治まってい れば、私は何も改めようとしないのだ」。

(おくだ としひろ)

細くでも、長く



私が当時の京都大学教養部に着任したのは1989年春のことでした。それ以前、1985年に文学部助手になった時にも、教養部の中国語を担当しておりましたから、そこから

数えると三十七年間ということになります。

1989年といえば、私のように中国のことを学んできた人間にとっては、忘れられない年でした。大学での授業が本格化しようかという四月の半ばに、中国の最高指導者の一人であった胡耀邦が死去、改革派の代表として人気のあった彼を追悼する人々が天安門広場に集まりはじめ、大きな政治運動となっていったのです。そしてご存じの方も多いかと思いますが、6月4日未明に、「人民解放軍」が全国から集まっていた学生、民衆を蹴散らし、多数の死者が出ることとなりました。どのくらいの人が亡くなったかは今もって不明、中国政府も口を閉ざしたままです。

当時、新聞やテレビで連日ただならぬ状況が伝えられる中、大学に入って初めて中国語に接する学生達を前に、何をどう話したものかと、沈痛な気持ちで過ごしたことがつい昨日のように思われます。何しろ、私自身中国留学から帰ってまだ4年しかたっておらず、よくしてくださった先生や友人たちがどうしているかと思うと、居ても立ってもいられない思いでした。

教養部での担当科目は、当初は中国語のみでしたが、文学部では自分の専門である中国の古典戯

赤松 紀彦

(総合人間学部 文化環境学系/ 人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

曲についての講義を担当し、総合人間学部、人間・環境学研究科が設立されると、専門科目の講義や演習を担当することとなりました。私は文学史的な概説というのがどうも苦手で、毎年のように、一つの作品を取りあげながら、それを読み解くというスタイルで授業を行なってきました。ひとくちに中国の古典戯曲といっても、古いものとしては元の雑劇やほぼ同じ頃の南戯とよばれる作品、そして明清の伝奇とよばれる長編戯曲など、大量の作品が残されているのですが、その中から元の雑劇の数々、そして『琵琶記』、『牡丹亭』、『桃花扇』、『長生殿』といった長編作品を学生とともに読み解くことは、たいへん有意義なひとときでした。

最後の一年、ゼミではずいぶん自由な話をさせていただいたのですが、最も楽しかったのは、清代の考証学者、程瑤田(1725~1814)による『釈虫小記』「螟蛉蜾蠃異聞記』を取りあげたことです。

みなさんは「ジガバチ」という蜂をご存じでしょうか。何とこの「ジガ」とはもともと漢語で「似我」と書きます。この蜂はイモムシを捕らえて麻酔し、生きたまま眠りこませてその体に産卵、幼虫はそれを食料にして育つという生態をもっており、古代の中国人はそのジィジィという羽音を「似我」~「我に似よ」という意味にとり、イモムシに呪文をかけて蜂の姿に変えさせるのだと考えていたのです。「蜾蠃」とはこのジガバチの異名で、『詩経』に見えており、こうした儒家の経典に見えることから、この蜂の名は古くからよく知られていました。

ガの幼虫やクモ、甲虫、コオロギなどを捕らえて幼虫の餌にするこうした蜂は、狩りバチと総称され、有名なジャン=アンリ・ファーブル(1823~1915)による『ファーブル昆虫記』に、何種類もの狩りバチについての詳細な観察記録が収められていることでもよく知られます。

程瑤田によるこの文章も、クモを狩る蜂とアオムシを狩る蜂についてのもので、乾隆四十七年(1782)の夏のことだと記されていますから、ファーブルに先立つこと約百年、こうした小さな生き物が知識人の目にとまることは中国においては極めて稀ですから、たいへん貴重な文章だといえます。

なぜこんな文章に興味をもったかというと、私 自身、中学時代は、いわゆる虫屋の卵、それも蜂 専門だったからです。土曜日などは授業が終わる や、制服のままで近郊の山へ捕虫網を携えて出か けたものでした。その頃、私が採集した蜂につい て、大阪市立自然科学博物館(現自然史博物館) による月刊誌『Nature Study』(17巻11号) に、 「本年大阪府下で採集した蜂について」という1頁 の短い報告文を載せていただきました。当時中学 二年生、1971年のことなのですが、ハバチの新 種?一種、関西では報告のなかったチャイロスズ メバチとクビナガキバチという蜂についての報告 で、当時神戸大学の教授であった奥谷禎一先生 (1920~2011)が同定に協力してくださいました。 奥谷先生はこの分野では大変有名な専門家でした が、中学生であった私を研究室にまで入れて下さ り、やさしく接していただきました。結局その後 この分野には進むことなく、先生ともお目にかか る機会はありませんでしたが、その穏やかなお話 ぶりは今も耳に残っています。

さて、昨年のことですが、生まれて初めて雑誌に発表したその報告が、専門的な論文に引用されているのに気がついたのです。奥田卓也ほか「大阪府内の都市緑地におけるスズメバチ類の種構成と優占種」(『日本環境動物昆虫学会誌』第22巻第

3号)というのがそのタイトルで、50年前に私が 関西での初めての採集記録として報告したチャイ ロスズメバチがその後 2001年と 2009年に大阪府 下で採集され、「分布域は北海道から本州中部にか けての日本海側に偏っている」この蜂が、大阪府 下で捕獲されている点について、「動向に注目する 必要がある」と述べられています。

論文が引用されるというのは、研究者としてなかなか嬉しいことであり、中学時代の、それも簡単な報告ではあるものの、自分の記録がこうして専門的な論文に引用されていることを知ったのは、当時のことを思い返す契機となりました。もう五十年前のものになってしまいましたが、その掲載雑誌、奥谷先生からいただいたお葉書、そして標本は今も大事に保存しています。今回あらためてそのお葉書を読み直したところ、次のように締めくくられていました。

「同一地域でもたんねんに採集してみて下さい。 自然保護問題にも関係した面白いことがわかるか も知れません。なかなかヒマがないと存じますが、 今後も細くでも長くつづけて下さい。」

昆虫の方では、「細くでも長く」とはゆかなかったのですが、専門の中国演劇研究は、まさに細く長く続けられたかと思います。これも人間・環境学研究科という恵まれた環境にいたからこそであり、同僚の先生方、事務の方々、そして学生諸君にあらためて感謝申し上げます。

(あかまつ のりひこ)



五十年前の標本

京都大学で、吉田南の地で

杉山 雅人

(総合人間学部 自然科学系/ 人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



教養部助手に着任し、 再びこの吉田南キャンパ スを本拠とするように なって35年が経ちまし た。18歳で岡山県北部の 小さな街から、希望に溢 れ不安に満ちながら京都

にやって来た少年が、今と同じく淡い緑の姿で優しく迎えてくれた教養部正門、現在の総合人間学部正門をくぐったときからすれば47年、言い換えれば半世紀近くが経ったことになります。宇治の化学研究所で大学院生・教務職員であった7年間を除けば、理学部専門課程のときもたびたびここに来ていたので、京都大学での時間のほとんどを、この地で過ごしたことになります。長い時間が経ったのを実感しています。

でも、昔のD号館・E号館・F号館、今はそれぞれ吉田南2号館・4号館・3号館と名前を変えましたが、それらの姿は今も変わらず、A号館は吉田南総合館として大部が新しくなったものの以前の趣も残しています。図書館は今も当時のままです。

大きく違うのは、あの頃と同じ全学部の1・2回生がこのキャンパスに集っているのに加え、総合人間学部、人間・環境学研究科の学生がここを固有の地として、学問に研究に励んでいることです。

私は1992年の総合人間学部開設のときには学 部固有の教員として、2003年の総合人間学部と人 間・環境学研究科の一体化ののちには研究科固有 の教員として学部・大学院に関わってきました。 教養部のころから、そして総合人間学部、人間・ 環境学研究科になっても、第三高等学校の流れを 汲むこともあってか、京都大学の中でも特にこの 部局には自由の、また文理混在・文理連携の雰囲 気が強く流れていました。そしてその雰囲気は今 も変わらず、この学部・大学院の大きな特色となっ ています。

自由の学風と文理混在・文理連携の思潮は、そ れぞれの学生や教職員にとって、具体的な学問知 識・研究成果として現れにくいのかもしれません。 このために、文理混在・文理連携を掲げているの に、それが結果として見えないではないか、と外 部から指摘されるのかもしれません。しかし、個々 の学生や教職員の学問・研究への取り組みの基盤 には、この二つへの強い意識があるものと思いま す。これまでの学界潮流、研究学説に捉われるこ となく自由にのびやかに羽ばたこうとする、一つ の学問・研究領域からだけでなく多領域にまたが る視点を持って考える、このことが総合人間学部、 人間・環境学研究科ではいつも意識されていると 言えます。それが総合人間学部での「研究を他者 に語る」、人間・環境学研究科での「教養教育実 習」、「学際研究演習」の取り組みにも繋がってい るのだと思います。

私はまさに、この二つの特色に後押しされて、 楽しくのびのびと教育と研究を進めることができ ました。教養部が総合人間学部、人間・環境学研 究科に改組されたこともあり、そのころから琵琶 湖を主な研究フィールドとして河川・湖沼の化学 研究に取り組むようになりました。陸水の物理学・ 化学・生物学を専門とする研究者からなる総合科 学の研究グループを組織し、モンゴルからロシア そして北極海に流れる全長 4400km に及ぶフブス グルーバイカルーエニセイ水系の研究を始めまし た。モンゴル・トルコ・キルギスの塩湖の比較研 究にも着手しました。文理連携とまではなりませ んでしたが、これらの研究を企画した根底には文 理連携から文理融合に至るような総合研究を目指 したいとの想いがあったのだと感じます。これら の研究のために、海外での国際学術協同調査を多 年にわたって、自由に気ままに続けさせてもらい ました。このようなことができたのも、この部局 であったからこそと思います。感謝の気持ちで いっぱいです。

トルコの塩湖、ワン湖の研究を始めることがで きたのは、総合人間学部、人間・環境学研究科に いたからこそでした。そのずっと前から、トルコ に Ca²⁺ が涸渇しHCO₃-と CO₃²-が濃集しているた めに pH が 10 を超える強塩基性の巨大塩湖がある と聞いていました。琵琶湖での研究から、夏季の 光合成活動の高まりにより、湖水の pH が上昇し て、沿岸堆積物から V·W·P·U が溶出し、それ らの濃度が高まることが分かってきました。そう いうことが起こるのなら、ワン湖でのこれらの濃 度は異常に高いに違いない、ひょっとしたら海水 中濃度よりも高いのではないか。この考えから、 ワン湖の研究をしたくて、学会のたびに知人にワ ン湖の国際協同研究について尋ねました。しかし、 誰一人として、ワン湖の研究者を知りませんでし た。

あるとき、教授会に、フランス語の先生がトル コからの客員研究員を迎えたという資料が出まし た。私は歓喜雀躍、その先生の研究室に走りまし た。すると、すぐさま、その研究員を紹介してく ださり、その方からワン湖の研究者を教えていた だきました。間もなく協同研究が始まりました。 予想したとおりの研究成果が得られました。

中国の湖沼を研究していたときには、こんなこ とがありました。中国や日本での陸水の研究をも とに、東北アジアでの水事情について総説を書く よう依頼されました。水資源・水環境と農業や工 業、日常生活との関連を議論することが求められ

ました。農作肥料の使用や地域経済についても言 及する必要がありました。しかし、こうした資料、 しかも国外の資料は、化学を専門とする私には全 く馴染みがないものです。資料収集に喘ぎ苦しん だ私は窮余の策で、人文地理学の先生に、なんと 次のような無礼で無謀な言葉でお尋ねしました。

「自然科学には、様々な科学データを収集した 理科年表というデータブックがあります。人文 地理学や経済学に理科年表のようなものはあり ませんか?」

しかし、その先生は怒ることなく即座に優しく 「杉山さんが言っているのは、多分、日本国勢図 会、世界国勢図会じゃないかなぁ~」と教えてく ださいました。それはまさしく私が求めているそ のものでした。これらの資料を基にして、何とか 総説を書きあげました。

これらのことは文理連携というほどのものでは ないかもしれません。しかし、文理混在の部局で あって多彩な研究者がすぐ近くにいたからこそ、 新たな研究の繋がりを作ることができた、文理の 知識を繋げることができたのだと感じます。今も とても有り難く思っています。

総合人間学部、人間・環境学研究科が、多彩で 多様性に溢れる学生・教職員が集う特長を活かし て、今後、更に発展・深化されることを願ってい ます。

(すぎやま まさひと)



キルギス・イシククル湖にて

連載企画「総合人間学とわたし」

「・」は和合



人間と環境を つなぐ「・」に ついて、これは 単なる足し算で はなく、掛け算 でなくてはなら

ないという言葉を何度も耳にしてきた。私はこれに違和感を覚えている。数の上で考えると、1+1は2になるが1×1は1にしかならないし、1/2+1/2は1になるのに1/2×1/2は1/4になってしまう。掛け算という言葉で、数の演算ではなく二つの種の交配(掛け合わせ)のような、インターラクションを通じて新しいものを作り出す操作を言わんとしているように思えるが、異なる種類のものを掛け合わせたら有効な新種が生まれるというのは楽観的すぎるように思う。ここでは、「・」の意味について私なりに考えてみたい。

その前に、私の研究の話をさせていただきたい。 私はもともと、プログラミング言語理論の観点から計算の仕組みについて研究をしていた。その中で、実数上で計算を行うための無限な表現に関するあるアイデアが浮かび、その構造の美しさに魅せられて、それについて考えてきた。この研究は 実用と離れているしこの分野の標準的アプローチからも距離があるのでメジャーな研究にはなり難いが、20年も続けている中で、いい研究コミュニティに属し、いい共同研究者や学生と出会い、いい研究ができたと思っている。この研究はまだ続

立木 秀樹

(総合人間学部 認知情報学系/ 人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

いているが、それについては今回はお話ししない。 ここ、総人・人環は、何を研究するかについて 自由である(と思っている)。誰にも干渉されず に、興味の赴くままに研究ができて幸せであるが、 自分の行なっていることと周りとの接点の少なさ に、本当にこれでいいのだろうかと不安に感じる ことがある。その中で、自分が大学人として存在 することの価値を最大限に高めるように、何かし たいと考えるようになってきた。

そんなある時、私の実数表現をシェルピンス キー四面体上に拡張し、正方形への射影を通じて 導出される正方形の色付けについて考えようとい う研究上のお誘いを、友人から受けた。私の表現 は実数のフラクタル性を活かしたものであり、フ ラクタル立体であるシェルピンスキー四面体とは 相性がよい。その研究は研究集会で1回話しただ けで終わってしまったが、その時友人は、4つの 正四面体を頂点でくっつけたものを作ってプロ ジェクタの前で回しながら説明を行なった。その 影の穴がふさがってきれいな正方形になるのを見 た瞬間、私はドキッとした。それまでシェルピン スキー四面体が正方形に射影されるということに 数学的事実として興味をもっていたが、私が感じ た美しさや驚きを、もっと多くの人に伝えられな いだろうか。これが、その後の一連の活動の原点 である。

まず、再帰的なアルゴリズムについて教えるの に、シェルピンスキー四面体の近似の工作を授業 で行なってみた。そして、シェルピンスキー四面 体に基づくオブジェを制作し、シェルピンスキー四面体と同じような構造をした2つのフラクタル (HフラクタルとTフラクタル) を発見し、その元になる2つの多面体 HとTに出会い、それらを抽象化したイマジナリーキューブの概念とその研究、それに基づいたパズルの制作とその授業への応用と話が続いていくのだが、紙面が足りないのでここでは述べない。興味のある方は、私のホームページや、2年前のオープンキャンパスの模擬講義のビデオ (OCW に登録されている) を見ていただきたい。

さて、シェルピンスキー四面体のオブジェ(正 方形に見える瞬間に、時計台の写真とエンブレム が浮かび上がるもの)ができた時、うれしくて研 究科長の冨田博之先生に見せにいった。今から思 うとそんなことで喜んでいた自分が恥ずかしい が、冨田先生は研究科長室にしばらく置いてくれ た。それが酒井先生の目にとまり、これで日除け を作ったら、風通しがよくて熱くならない日除け ができるというアイデアのもとフラクタル日除け の研究を行い、商品化までしてしまった。

シェルピンスキー四面体を世の中に広めたいと思っていた私には願ったりかなったりだが、正直なところ、これを日除けにすることに、かなりの違和感を覚えていた。シェルピンスキー四面体は辺方向から射影すると正方形の影を作るが、それ以外のほとんどの方向では、影の面積は0になり、日除けとして役にたたないはずである。もちろん、実際に作るのは有限の近似なので影はできて、魅力的な形の影のもとでみんな勉強したりご飯を食べたりしているし、フラクタルな日陰で遊んだ子供が将来何に興味を持つのだろうと考えるとワクワクする。しかし、数学者としては、「木漏れ日が気持ちいい」という酒井先生の巧みな言葉に誤魔化されているような気がしてならなかった。

そう思いつつも、シェルピンスキー四面体の影の面積がほとんどの方向で 0 になるということの確証がないために、酒井先生には何も話せずにいた。これについて調べてみたが、どこにも書いていない。専門が異なる私に解ける問題とは思えなかったし、他の研究で手一杯なので、これについては放置していた。しかし昨年、3D プリンタを購入してフラクタルを精密に作れるようになったのを機に真剣に考えてみると解くことができ、次のことが分かった。

シェルピンスキー四面体の4つの頂点の 影、A、B、C、D が、 $\overrightarrow{AD} = x\overrightarrow{AB} + y\overrightarrow{AC}$ とい う関係にあるとします。 x と y がともに、 <u>奇数</u> という形の有理数である時に影は正の 面積をもち、それ以外の時には影の面積は 0になります。

こういう影を作る光の方向は有理数のように無 限に存在するが、(測度0という意味で) ほとんど 存在しない。その方向が高校生でも分かる言葉で 説明できること、その証明に計算機科学的なセン スが生かされたことが、嬉しくてたまらなかった。 さっそく、専門が近い角先生とその院生の中島由 人君(彼とは昔から縁がある)に聞いてもらい、 そちらの分野の研究集会で話をし、この結果に自 信をつけてきたが、昨年末に、30年前に発表され た論文にこの本質的なところが証明されているの を見つけてしまった。しかし、そのことでこの数 学的事実の価値が下がるわけではない。日除けの もとでたたずんでいる人に、「この屋根のフラクタ ルをどんどん細かくしていったら、影はどうなる と思いますか?この四点を A、B、C、D とすると …」とテーブルの影を指差しながら説明をしたい くらいである。もちろん、嫌がられるのが分かっ ているのでやらないが。

3D プリンタで作ったシェルピンスキー四面体を太陽光のもとで回す Youtube ビデオを作成したので、是非、下の QR コードから見ていただきたい。影が連続に変化する中で、突然面積のある図形が現れるのは手品を見ているようだ。私がここまで執念を持てたのは、この結果を酒井先生に伝えたかったからである。まさに、総人のおかげである。





この写真の影では、x = y = 1/3です。

さらに、つい最近、HフラクタルとTフラクタルについても同様の結果を示すことができた。私の研究の動機に、人を喜ばせたいという気持ちがあるように思う。喜んでくれる人がいるから(それは幻想で、喜んでくれる人がいると私が思っているだけかもしれないが)頑張れる。その相手は多いほどよい。私は、数学をコミュニケーションの道具にしたいのかもしれない。

教育のことも少しふれておきたい。自分の専門を教えるのが本来の先生の姿なのかもしれないが、具体的な問題を中心に考えることばかりしてきた私には、ある分野を俯瞰してその分野の専門家を育てる教育はできそうにない。私は何を指導すればいいのだろうと思っていたが、博物館でのイベントや学園祭の研究室企画などで、学生や自分が見つけた面白い数学を伝える活動を行なっている中で、優秀な学生が自分の研究したいネタをもって私のところに来てくれるようになった。学

生には、(私が興味をもてる範囲内で)好きなことをさせている。最近は、ゲーム (必勝性を理論的に求める話や、強いゲームプログラムを作る話)に興味のある学生が集まっており、私のセミナーはもっぱらその話だ。ゲームは遊びと思われるかもしれないが、ゲームとは目的をもった複数の主体がインターラクションを行いながら、それぞれの価値を最大化する行為であり、敵対するのではなく協力して同じ目的を達成する形のゲームもある。これを、規則と利得を明確化した実世界のモデルの中で、人間のとりうる最適活動について調べていると思えば、「総合人間学」として、ずれたものではないと考えている。学生と一緒に考えるのは楽しいし、彼らが、これからどんな面白いことをしてくれるのか、楽しみで仕方がない。

さて、最初の話題に戻ろう。あるお坊さんから、「因縁和合」という言葉を教えていただいた。「因」というのは、人間の中に根源的にある、何かをしたいという気持ちである。人は誰でも、因をさずかって生きている。しかし、どんなに強い因を持っていても、それだけでは実現されない。縁、すなわち、周りの人による支えが必要である。縁は、自分で選ぶのではなく、自分の両親や同僚、たまたま出席番号が隣の人など、環境として与えられるものだ。その、因と縁が和合することにより、ものごとが実現されていくという意味である。「人間」(すなわち因)と「環境」(すなわち縁)の間にある「・」の意味は和合ではないか?それが、私の意見である。

「人間・環境学研究科」という名前を、それぞれの人が、自分の因として行なっている学問を大切にし、お互いに、他人の因に対する縁になる、そのような、学問を行う場を表した名前と考えるのはいかがだろうか。因というのは、個々の研究内容というよりも、なぜ研究をしているのかという、その人の心の奥底にある目標なのだと思う。分野

が違うと個々の研究内容を伝えるのは難しいが、 そのような根源的なものは伝わるのではないだろうか。無理に他人の縁になろうと思わなくても、 他人の因に興味を示し、インターラクションを楽 しんでいれば、自然に縁になれるのではないだろうか。

自分の中にあるはずの因は、本人は気づいていないことも多いし、変わっていくこともあろう。 我々がよく学生に口にする「自分探し」とは、自 分の因に気づくことに他ならない。そして、学生 が因に出会うのを手伝い、その縁になることが、 我々教員に与えられた役割と言えないだろうか。

研究者としては、みんな異なる因を持っているのが当たり前だが、同じ目標を持って活動していないと、組織を運営していくのは難しいだろう。その点、学生の縁になりたいという思いは、我々が共通に持っているはずだ。将来の世の中を生きる学生たちに対して役に立ちたいという因(目的)を共有しているのだから、我々はこの協力ゲームを楽しむことができる。

ところで、この冊子の表紙を見ると、「・」で結 ばれたものがもう一つある。人間と環境、総人と 人環、我々は、二重の因縁を和合させることを任 務とする部局にいるのだ。

(ついき ひでき)

連載企画「総合人間学とわたし」

総合人間になるための学部?

小木曽 哲

(総合人間学部 自然科学系/ 人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



昨夏にオンラインで開催されたオープンキャンパス 2021 で総人生たちが作ってくれた「現役総人生による学部紹介」という動画を見た。動画には、インタビュー編、ド

ラマ編とあるが、いずれも非常に興味深いものだった。インタビュー編は、総人生達が実際にどのような思いでこの学部での日々を過ごしているのか、生の声が聴けて大変参考になったし、ドラマ編も、単純にドラマとして楽しい内容だっただけでなく、現役総人生達からみた総人像の一端が垣間見えて興味深かった。

このドラマには、伝説の総人生「総合寺極(そうごうじきわみ)」なる人物が登場する。彼は「総ての学を合わせ持ち、人の世の間(あわい)を満たす男」、つまり、総合人間学部の理念を達成した人物の具体像として描かれている。これはもちろん、ドラマの一要素として戯画化されたものであり、現役総人生達が本気で総合人間学をこのように捉えている、というわけではなかろう。しかし、彼らの持つ総合人間学観が多少なりとも反映されているのも確かだと思う。私は、ドラマを楽しく見ながらも、総合寺極として描かれる総人像に、心に引っかかるものを感じざるを得なかった。

私が総合寺極に感じた引っかかりは、毎年3月末に総人卒業生の誰かが「総合人間になりました!」と SNS で報告する現象にも感じるものである。このような、総合人間学=総合人間になるた

めの学、という語られ方が(ネタとは言え)世の中には広く行き渡っている事実。私にはそれが、総合人間学部の理念が学生達や世の中に十分に伝わっていないことの象徴であるように思われ、この手の話を見聞きするたびに心の隅が痛む。

では、ネタではなく「本当の」総合人間学とは どういうものなのか。改めて、京都大学通則に規 定されている総合人間学部の目的を確認してみる と:

総合人間学部は、人間と文明と自然の結び付きに 新たな次元を確立するために、人類が直面する 様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通底させ る形で問い直し、これまでの人文科学・社会科学・ 自然科学を融合した新しい学問の体系を構築する こと、すなわち、新たな「人間の学」の創出を目 指す。(「総合人間学部教育研究上の目的」)

とある。大学の公式な文書の中で定義されている 以上、これが私たちにとっての「本当の」総合人 間学であり、それ以外のものではあり得ない。た だしこの定義は、少し抽象的すぎて理解しづらく、 それが、総合人間学部をわかりにくくしている一 因かと思う。ただし、私の心に引っかかるのはそ こではない。定義がわかりにくいとは言え、総合 人間学って何?と問われたときに出てくる答え は、人によってそれほど違わないのではないかと も思う。私なりの答えは、「人間と人間を取り巻く 世界を、様々な学問的立場から総合的な視点で理 解することを目指す学問」である。「人間ってこう いう生き物なんだよ」とか「人間社会はかくあるべき」とか言う場合の「こういう」や「かくある」を、様々な学問的視点から総合的に突き詰める営みが総合人間学である、と私は理解している。

この理解が妥当だとして、私の専門である地球 科学の総合人間学における役割を考えてみる。こ れは結構な難問であり、実は総人に着任して以来 ずっと私の頭を悩ませてきた問いである。きっと、 総人を去るまでずっと考え続けることと思うが、 現時点で暫定的に答えを出すとすれば、「人間とい う生物がいかなる存在なのかを問うための材料 を、46億年にわたる地球の歴史を俯瞰する視点か ら提供すること」であろうか。今から46億年前に 原始太陽系の中で誕生した数々の惑星の中で、地 球だけに生命が誕生し、その生命がやがて人類へ と進化して現在のような高度な文明が構築された のは、どのような必然と偶然の結果なのか、そこ にはいかなる条件が必要だったのか。そういった 問いに取り組むことは、「人類が直面する様々な問 題を人間活動の広範な諸領域を通底させる形で問 い直す」という営みの一部なのでは、と今のとこ ろは考えている。

さて、私のこのような地球科学観(あるいは総合人間学観)を、総人生達にどれほどうまく伝えられているだろうかと自問してみるに、十分に伝えられているとはとても自信を持って言えない。そもそも、上に述べたような観方は、私自身が地球科学という専門の世界にどっぷり浸かる経験を経た後に持ち得たものである。それを、学問の世界の入り口に立ったばかりの総人生達に理解してもらうのは、相当に至難の業であると思う。せめて高校までに地球科学にある程度触れていれば、まだ何とか伝えようがある気もするが、入学者の多くは高校地学を履修していない。また、入学後も地球科学系科目を履修する総人生は残念ながら少ないため、私なりの地球科学観を伝える機会さえ極めて限られている。

これは地球科学に限った問題ではないと思う。

総合人間学部に存在する多様な学問分野には、高 校生が大学に入学するまでに接する機会のないも のが多い。また、総人に入学したところで、1人 の学生が4(+α)年という時間のなかで触れら れる学問の範囲には限りがある。したがって、す べての総人生は、多様な学問の多くに接すること なく卒業する。これでは、総合的な視点で人間を 理解することを目指すのはかなり難しい。「学部の 理念はあくまで学部という組織に課せられたもの であって、学生個々人にとっての目標ではないし という言い方はできるだろう。そうだとしても、 では総人生はどうすればいいのか。 $4(+\alpha)$ 年間 ではその一部にしか接することもできないほど多 様な学問に囲まれた中で、何をどのように学び、 どのような問いに取り組んでいくことが、総合人 間学部における学びなのか。それを私たちは、学 生や世の中に対して明確に示せていないのではな いか、という思いが、総人に来た当初から私の心 の中にずっとある。これこそ、総合人間学=総合 人間になるための学、という言説(ネタ)に心が 痛む根本の原因である。

実際には、総合人間学部での学び方については、 学部便覧だけでなく、履修モデル&教員プロフィール冊子にも詳細な説明が掲載されている。 また、新入生に対しては、入学時の履修ガイダンスで丁寧に説明もしている。しかし、ガイダンスや冊子での説明だけをもとに学びの方針を立てるには、総人における学問の多様性とカリキュラムの自由度はあまりに大き過ぎる。この多様で自由な場を、すでに何らかの専門の世界にいる教員からの視点ではなく、学問の入り口に立ったばかりの学生の視点に立って見る、という作業が、私たち教員には必要なのではないかと思う。そして、この多様で自由な場を学生と一緒にさまようこと、これこそが実は、総合人間学部での学びの指針を明確に伝えるための第一歩なのかもしれない。

(こぎそ てつ)

新任の先生方より

着任のご挨拶

THIES Holger

(人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



こんにちは。2021 年4月に特定講師と して着任したホル ガー・ティースで す。ドイツに生ま れ、ダルムシュタッ ト工科大学で数学 とコンピュータ・サ

イエンスの学士と修士号を取得しました。その間、ドイツのダルムシュタット工科大学で数学の修士課程、学部に在籍しており、数学と情報科学を専門に学んでいました。出身も大学もドイツ国内であり、ヨーロッパの国々を訪れる機会は数多とあったのですが、ヨーロッパから足を踏み出すという経験がありませんでした。そのため、まだ見ぬ世界での生活や経験を通して、新たなことに触れ、学び、ドイツだけでは知ることのできないであろう知識を勉強してみたいという気持ちが強るありました。そんな中、大学から東京大学への留学制度を利用できる機会があり、ヨーロッパから遠く離れた日本へとやってきました。

しかし、日本への留学がスタートし、わずか5ヶ月で日本を離れ、ドイツへ帰国しドイツの大学での研究にフォーカスを当てる必要がありました。 東京に滞在できた期間はわずかだったのですが、日本での研究環境はとても刺激的で、ドイツの修士課程を卒業したら、また日本に戻り、研究をしたいと考えるようになりました。

そこで、2015年に再び日本へ渡り、東京大学で博士課程に進学しました。そして、2018年8月に東京大学で博士号を取得しました。京都に来る前は、福岡にある九州大学大学院システム情報科学研究院の助教として2年間勤務していました。

このように、非常に幸運ながら、日本で暮らし

た期間が短いのにも関わらず、すでに東京、福岡、京都という全く異なる3つの地域での生活が叶いました。そしてさらに、地域ごとに異なる日本のたくさんの街並みや観光地、人々の魅力に触れることが可能となりました。

現在私は、特定講師として数学とコンピュータ・ サイエンスの接点に興味を持ち研究しています。 特に、数学の問題をその計算内容という観点から 見ることにより、計算可能解析学、実数の計算、 アルゴリズム、精度保証付き数値計算、プログラ ム検証などを行なっています。また、実際の研究 テーマとして、計算理論と数理論理学の観点から 数値計算や連続的数学における問題の複雑性を調 べています。そのため、離散的である計算量のモ デルの一般化について考えて、微分方程式、力学 系、計算幾何などの分野の様々な具体的な問題の 計算可能性と計算量について研究します。理論だ けではなく、精度保証付き数値計算の実装につい ての応用にも興味を持っています。最近は特に形 式検証とプログラム検証の研究もしています。証 明支援システム Coq を利用して、実数計算のアル ゴリズムの検証を行っています。

そして、これまでの研究内容から学んだこと、 日本という全く異なる文化の中で学び得たことの 中に、まだ見ぬ発見がたくさんあり、とても刺激 的でした。そしてそれは、日本人にとっても同様 であると考えています。日本で育ち学んできた、 今後社会に出ていく学生たちにとって、他国の知 識を交えながら学びに繋げていくということはと ても有意義であると考えます。ドイツで得た知識 を生徒たちとの授業の中に交えながら、より学び のある授業を作っていきたいと考えています。

(THIES Holger)

新任の先生方より

「他者」を架橋する

DE ANTONI Andrea

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



昨年の4月に共生文明学 専攻、文化・地域環境論講 座に着任しました。それ以 前は7年間立命館大学国際 関係学部・研究科に勤めて おりました。私は文化人類 学を専門として、特に宗教 とスピリチュアリティにつ いて研究しています。イタ

リアのヴェネツィア市生まれで、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学の東洋学部日本語日本文化学科で日本語や日本文化を勉強しました。「文化」や「社会」などを理解するためにはより理論的な視座が必要だと感じたので、文化人類学を理論枠組みとし、同大学で博士まで取得しました。

文化人類学はフィールドの言語を学ぶだけではなく、長期的なフィールドワークを重視する学問なので、私は2006年から定期的に日本に調査に来ていました。その際に、京都大学の文化人類学者の方々と関わらせていただく機会がありました。そのご縁で、2010年には京都大学人文科学研究所に学術振興会の特別研究員として受け入れていただきました。当時から人間・環境学研究科の先生方や学生とも関わりがあったので、昨年着任したばかりでまだまだ理解不足のことが多いですが、少し「ホーム」に戻ってきたような気がして嬉しく思っています。

博士後期課程の研究は、現代日本における死や 魔界へ繋がるとされる場所(恐山・立山・京都市 六波羅など)を対象とし、「伝統」と社会的記憶、 場所の観光化、観光客の感覚や体験、差別等の論 点から分析してきました。たとえば、恐山と六波 羅の場合、その場所と関わる時に生じる感覚が、 朝鮮人や非人差別についての現代的記憶の構築過 程と関わっている点について論じました。

研究員の時は、現代京都の「心霊スポット」を 訪れるツアーに注目し、後期資本主義社会の中で 霊的な存在がどのように成立するかを、インター ネット上の噂、感覚、消費といった観点から明らかにしてきました。

現在は、現代日本・イタリア・オーストリアにおける宗教的治療と除霊の比較研究を行っています。特に、憑依された人々の経験に注目し、身体的知覚・情動と環境との相互作用の観点から、憑依や除霊によって「治癒」することとは何かを明らかにするための研究をしています。それは宗教だけではなく、病院を中心とする医療実践とも深く関わるため、両者の関係も研究対象になっています。

自分の研究を説明すると、なぜそのような流れ になったのかを不思議に思われることが多いです が、私にとってそれは自然な流れでした。これら の課題はすべて、調査の中で偶然に出会った、私 にとっては不思議に思える「他者」だったという 共通点があります。「ここには霊が出る」、或いは 「私には霊が見える」という人がいれば、それが何 を意味するのか、私は気になってしまって仕方あ りませんでした。また、日本でもイタリアでも「霊 に憑かれたことがある」と語る人々と私は多く出 会いましたが、その経験がどのようなものなのか が私には想像がつきませんでした。だからこそ、 彼ら・彼女らの経験を詳しく教えてもらおうと思 いました。研究を通して、彼ら・彼女らと一緒に 何とかお互いに理解し合うような橋を作ること で、その「他者」と私の間の境界を乗り越えたい と思ったのです。

授業においても私は同じスタンスでのぞんでいます。授業では相互に好奇心を持ち多様なことを学ぶという共通の目的を通じて、「私」と「あなた」、そして学問という更なる他者を架橋していきたいと思っています。ヴェネツィアは水の都で橋が多いですが、こうやって橋を作りたがるのはもしかすると自分のヴェネツィア人気質かもしれません。

(DE ANTONI Andrea)



編集後記

◆『総人・人環広報』第68号をお届けいたします。今号では、この3月末をもって退職される4名の先生方から、また2名の新任の先生方から御挨拶を頂戴しました。

退職される先生方は、私が教養部で授業を受けておりました30年程前から長年にわたり、総人・人

環にてご尽力下さっていました。年月ばかりでなく重責も加わり、本当にお疲れ様でした。深く感謝申し上げますとともに、これからのご多幸とご活躍も祈念致します。新任の先生方とは、直接お話しできる機会も限られておりますので、ご寄稿を通して親睦を深めて頂けましたら幸いに存じます。また、連載企画として、立木先生と小木曽先生からご寄稿を頂きました。高度な専門性から総人らしくお書き下さり、興味深く読んで頂けると存じます。ご寄稿下さりました先生方、誠に有難うございました。



総 合 人 間 学 部 人間·環境学研究科

広報委員会